

むきばんだ花だより 3月

2017. 3. 4

◎アオキ(青木)、ミズキ科、アオキ属

別名、ダルマノキ。常緑低木。雌雄異株。名前の由来：一年中、青々とした葉を茂らせることから。学名(属名)のアウキバはアオキバ(青木葉)に由来し日本の古来名であることを示しています。○花言葉：若く美しく・永遠の愛。○日本特産種で、耐寒性が強く、北海道や日本後部に多く分布し、日陰にも強いので庭木に多く利用されます。葉の緑と果実の赤のコントラストが美しい。江戸時代中期にヨーロッパに伝わりましたが、雌株のみであったため結実せず。改めて雄株の採集が幕末に行われたと云われています。アオキの果実は2cm程の核果で、冬に赤く熟し、春までに鳥(ヒヨドリ、シロハラ)に食べられるか、落ちてしまおうかですが、6月過ぎても赤い果実が枝に残っているのは、ほぼ確実に虫こぶ(「アオキミツクレフシ」と呼び、「タマバエ」の幼虫が中に入っているため。)です。この変形した果実が別名「ダルマノキ」の由来と思われる。○アオキは外用薬として、やけど・腫れ物、凍傷、虫刺され等の妙薬とされ、葉の汁を煎じ煮詰めたり、葉を煎ってまかくして使い、内服薬としては、便秘薬として使ったようです。有名なのは「陀羅尼助＝だらにすけ」です。行者の秘薬として有名な陀羅尼助は黄蘗(おうぼう)《キハダの別名》で作られますが、地方によって添加物が異なり、奈良ではアオキのエキスを入れたそうです。アオキを入れると黒光りが美しい陀羅尼助になり、アオキの持つ外用薬の効能が認められたと云います。★有用植物(アオキの雄木)を求めて探検をした、「プラントハンター」の話は有名なようです。

★撮影日：2017.3.4 ★撮影場所：妻木山地区



◎タブノキ(楠の木)クスノキ科、タブノキ属

常緑高木。両性花。古名：ツママ(都万麻)。別名、イヌグス、タマグス、ダモ。名前の由来：朝鮮語の方言でドンバイ(独木舟)が訛ってタブとなった(丸木舟を作る木の意味からタブノキとなった)説。

朝鮮半島から日本に渡来した船は、全てタブノキの材で作られたと云われました。また、豊が宿る木とされていたことから「豊(たま)の木」と呼ばれ、それが次第に「たまの木」→「たぶの木」に変化した説。等があります。本州 秋田以南から沖縄、朝鮮半島南部、台湾、中国の海岸近く(成育する)。

照葉樹林の代表種で、緑化樹として栽培されます。材は硬く、かつては建築の土台・鉄道の枕木にも使われ、現在でも家具、美術品の彫刻、楽器等に使われています。樹皮はタンニンを含むため、黄八丈の染料として、また、以前は魚網の染色にも使用されました。島の名前の由来となった「八丈」とは、8丈の長さ(1丈は約3m)で織られた絹織物で、他にも美濃八丈、尾張八丈、秋田八丈等各地に特産品があります。タブノキは古代からの木のように、万葉集の中では「都万麻(つまま)」と呼ばれていたようです。なを、葉や樹皮を粉末にして水を加えると粘りが出るので、線香や香取り線香を作るときに使われました。

○花言葉「無限の悲しみ」・「正しい主張」 ★撮影日：2017.3.4 ★撮影場所：妻木山地区



タブノキ(クスノキ科、タブノキ属)の材の断面の断面で撮影した木。中心に黒い樹皮の層が現れている。→ 妻木山地区、2017.3.4撮影



クロキの春の花(ハイノキ科、ハイノキ属) 妻木山地区、2017.3.4撮影



コバノオマズミ(スイカゴウ科、オマズミ属) 妻木山地区、2017.3.4撮影

◎オオバヤシャブシ(大葉夜叉五倍子)

カバノキ科、オオバヤシャブシ属。落葉小高木。雌雄同株。雌雄異花。別名、ハリノキ。日本原産で本州(福島県以南の太平洋側)、四国、九州の海岸近くの山地に多く分布する。名前の由来：大きいヤシャブシの意味で、不気味な松かさ状の果実を「夜叉」に譬えた。また、「和名の一部の五倍子(ふし)とはヌルデの虫こぶを言い、その成分であるタンニン黒色の染料にするが、本種の果実も、黒色の染料にするところからフシと呼んだらしい。」

○花言葉：永遠。★ヤシャブシ類は根に根瘤菌が共生しており、空気中の窒素を養分として取り込む能力があり、痩せ地でも良く育つので、法面緑化や砂防用として各地で多く栽培されました。○近縁種にミヤマヤシャブシ・ヒメヤシャブシがあります。

本種の葉は互生し、長さ6~12cmの三角状で葉脈は、はっきりした重鋸歯(それぞれの鋸歯に小さな鋸歯がある。)があります。芽は枝先から、葉芽、雌花序、雄花序の順に付きます。雄花序は蕾の時は短く直立し、展開すると長さ5cmくらいにもなりやや曲がって垂れ下がる。果穂は、1個のみ上向きに付き枝分かれしない。ヤシャブシは、葉が小さく枝先から雌花序、雌花序の順に付き、花穂が2個つつ着ます。ヤシャブシの葉裏に毛があるもの、ミヤマヤシャブシと云います。ヒメヤシャブシは葉の幅が狭く、果穂が5~6個ずつ付きます。カバノキ科の植物は風媒花で、黄色い花粉を大量に飛散させます。近年、ヤシャブシ類は、花粉アレルギーの原因となることが判明し、都会周辺では植栽が敬遠されている様です。人間の都合で有用植物となったり有害植物となったり、植物には大変迷惑なことです。ね。!

★撮影日：2017.3.4 ★撮影場所：妻木山地区。



◎アオモジ(青文字)クスノキ科ハマビワ属

落葉小高木。雌雄別株。別名：タイワンクロモジ、シヨウガノキ、コショウノキ、ソロバンノキ、卒業花。名前の由来：同じクスノキ科のクロモジに対し、枝が緑色を帯びていることから。枝は芳香があり柊枝の材料に、成熟した果実はレモンの様な芳香と辛味があるので香辛料に利用され、シヨウガノキ・コショウノキと呼ばれています。また、花姿からソロバンノキ、開花時期から卒業花の名もあります。○花言葉：「友人が多い」原産は台湾、マレーシアで、九州南部から沖縄に多く分布し、本州西部、四国でも見られます。むきばんだ遺跡公園内には島根大学、「生物資源学部」の調査「公園内掲示物参照」によると、調査時(約500本(♂201本、♀271本、未着花34本))のアオモジが生育していたそうです。これは米子市郊外(陰田地区)の花弁栽培農家が切り花用として植えたものが野生化したものと思われませんが、切り花用は♂木(花が多く着き綺麗)が多くて比較的限られた範囲で繁殖しながら徐々に広がっているようです。黄色い花の満開も間近です。

★撮影日：2017.3.4 ★撮影場所：妻木山地区



満開間近の「アオモジ」の花



スイバ(クワ科、アキバ属) 妻木山地区、2017.3.4撮影



スイカゴウ(スイカゴウ科、スイカゴウ属) 妻木山地区、2017.3.4撮影

◎アカツメクサ(赤詰草) マメ科、

シヤジクソウ属。多年性草本、薬用植物。

別名 ムラサキツメクサ、レッドクローバ。

○ヨーロッパ原産の帰化植物です。明治初期に渡来し、シロツメクサと同様(シロツメクサと共にマメ科の窒素固定植物で地力増進に活用されます。)に、牧草、緑肥、干し草として栽培されました。近年では各地で野生化し、アカツメクサは日当たりの良い山野の里近くに多くに、シロツメクサは、都会の空地などに多く見られるようになりました。

○名前の由来:「シロツメクサ」に様子が似ていて、花が紅紫色だから。稀に白花を咲かせる株があり、この変異が固定された園芸種をセッコツメクサ(雪花詰草)又はシロバナアカツメクサ(白花赤詰草)と呼びます。○**花言葉:善良で陽気、豊かな愛、動物、実直**。○アカツメクサは薬用植物で夏季、開花前の蕾、開花直後の花種を採取し日干しで乾燥する。これを便秘、咳や痰、強壮などに煎服したり皮膚疾患、おできや通風等の体質改善に有効と云われハーブとしても多用されます。○食べられる野草です。

【食べ方】は、葉は、ゆがいてアクを抜き、油き炒め、あえもの、かき揚げ、花は花酒で楽しむ。

《シロツメクサも食べれます。(柔かいのでゆがすのを軽くする)》

★撮影日:2017.3.4 ★撮影場所:妻木山地区。



◎ヘラオオバコ(笹大葉子)オオバコ科、

オオバコ属、多年草 ヘラオオバコは、江戸時代に渡来した帰化植物です。日本、朝鮮半島中国に分布する多年生の草本です。生育地は路傍や牧草地、堤防などで刈取りには強いが踏み付けには弱いと云われます。別名:オンコノ(オオバコ(大葉子)、マルコ(丸子葉)、カエルハ/ギョーロウ(蛙葉)、スモウリグサ、ヒキアイ(引き合い) 名前の由来:オオバコの仲間ではありますが、葉は細長く毛深く、笹(へら)に似ていることの意味。日本在来種と同じ、オオバコ科に属し全体像も、オオバコよりずっと大きく地下に太い根茎を持ち、葉は全て根生で細長く長さ20cmにもなります。春から夏にかけて高さ30cm程の花茎を伸ばし、先端に花穂を付け下部から上へ次々と花を咲かせます。その独特な花の形が「野の花」として、よく目立つ花です。ひらひらと白い花びらのように見えるのは、実は雄しべです。そして小さな花を集めた花穂は、縦に伸びて、雄しべの部分は、丁度ハチマキ状に白い輪を付けたように見えます。雌しべは雄しべより先に成熟する「**雌雄異熟=雌性先熟**」で、自分の花粉が自分の雌しべに着かないようにして健康な子孫を残す植物の知恵です。素晴らしい、早く花を見たい。

○**花言葉:—まどわせないで—**

★撮影日:2017.3.4



ヒメオドリコソウ (シソ科、オドリコソウ属) 妻木山地区、2017.3.4.撮影



シシギシ (夕霧草、シシギシ属) 妻木山地区、2017.3.4.撮影



ハコベ「コハコベ」(ナデシコ科、ハコベ属)春の七草の一つ 妻木山地区、2017.3.4.撮影



ボトケアザ (シソ科、オドリコソウ属) 妻木山地区、2017.3.4.撮影

別記

大山の歴史を語る

～謎とロマンの宝石～

「団子石/饅頭石」

遠い昔(約2万年前)、大山が噴火していたことを物語るものに、「団子石」があります。人知れず山野に転がっている小石ですが、大山噴火を雄弁に、そしてロマンチックに現代人に語りかけてくれます。

「団子石」とは、ほぼ鶏卵大の丸石で、中に黒紫色のアンの様な粘土が入っている小石です。大山寺洞明院に蔵される「諸堂舎棟札写」の中に「団子石」と題する一文があって、その大要は(大山寺古記によると、昔、神宮皇后が新羅へ向かわれようとした時、懐妊中であつたので、大山大智明権現が団子石とを献上された。皇后は石を産して出陣し、橿原のち応神天皇を産された。その余慶を大山の山中に送りかえされたのが団子石である。武士は、この石を籠の内に納めて勝利を祈り、女子は、安産のために重宝する。疫病・オコリに服用すれば忽ち平癒する。云々)とあるそうです。団子石とか饅頭石と呼ばれたこの鉱物は、正倉院の種々薬帳「正倉院」には、唐代の薬物そのものが今なお保存されているそうです。その多くは奈良時代の 天平勝宝8年(756)、聖武天皇崩御七七忌に孝謙天皇・光明皇后が東大寺盧舍那仏(東大寺の大仏)に献上、同年建立の正倉院が保管したもの由来します。これらの科学的調査が行われ、1955年には報告書「正倉院薬物」の巨書が刊行され世に明らかになりました。種々薬帳の第一巻の18には萬餘粮(ウヨリヨウ)1斤9両2分と記載があり、19には第一萬餘粮(ダイイチウヨリヨウ)2斤12両と記載されています。?鉄鉱質の皮殻内部に含まれるのは、鉄分の含有量の高い、赤色 紫色の粘土と考えられるが、現存しているのは皮殻のみで、内部の粘土物質は失われて詳細は不明です。『神農本草経』では大山の山谷に産するとして萬餘粮と区別していますが、適用は同じです。』に載る萬余粮や太一余粮と同類の石薬で、中の粘土が消炎、セキや発熱に効くと考えられていた。これを久しく服用すれば肌えず、体の動作が軽くなり飛行千里、神仙に入ると考えられていた。それで大山の土産として広く知られていた様です。この説話を裏付けるように、今でも大山の山麓(中山、岸本、会見、倉吉、羽会、大山、「妻木碗田内」)から発見されます。記録を探せば、江戸中期の「郷村帳」日野郡宮原村の条に「ササト山に赤坂団子あり。白き団子の中にアンのごときものあり。ひたるき時(空腹時)にこの土をなめれば良きなり」とある。等、「伯耆民談記、儒学者・広瀬旭延の紀行「日聞瑣事備忘録」に詳しく記されています。この団子石を調査した鳥取大学の学術報告書によれば、これは大山の噴出物で浮石(軽石)質の堆積しているところへ地下水が浸透してきた球状のギブス石と云われ、「アルミナ球類」と命名されました。

「神農本草経とは中国最古の薬物書」

付記

最近、米子市立山陰歴史館企画展「絵図でたどる

米子城の歴史」を見学したところ、

たまたま「団子石」(国図館長・所蔵)の展示を見学

したので資料を集めてみました。



団子石 (饅頭石) 妻木山、20.17.3.23.採取



オネイスラフツル(オネイトリ、夕霧草科) 妻木山地区、2017.3.4.撮影

★むきばんだを歩く会★

- 指導：鷲見寛幸先生(鳥取県自然観察指導員)
- 毎月第1土曜日午前9時30分～正午
- 入会金 2000円 毎回資料代 300円 いつでも、どなたでも入会可能です
- 問い合わせ:むきばんだ応援団「むきばんだをあるく会」